

漁海況予報事業 一抄録一

田村 眞通・青山 宝蔵・田中 裕憲
中川 賢三・涌坪 敏明・大川 光則
菊谷 尚久・白取 尚実

発 表 誌 名

平成元年度 漁海況予報事業結果報告書

抄 録

I 海 況

1. 日 本 海

平成元年度の対馬暖流の勢力は11月に入り平年並に戻ったものの、それまで各層最高水温、北上流量とも平年より高めからやや高めで推移した。特に4～6月初めにかけて対馬暖流の勢力は平年より強勢でスルメイカの北上は順調であったが青森県沖に来遊した6月中旬～7月に対馬暖流は弱勢傾向に転じた。この海況がスルメイカの北上を停滞させて好漁場の持続に結びついたものと思われる。

2. 太 平 洋

津軽暖流は平年に比べ夏季までは弱勢だったが、11月には平年並に回復した。親潮系水はこれと連動する形で秋頃まではえりも岬より三陸中部沿岸にまっすぐ差し込んでいたが、11月以降津軽暖流の張り出しをかわす形で三陸南部へと差し込む形をとった。このため三陸北部沿岸の表面水温が平年よりやや高めに推移し、このことが秋サケ延縄漁がふるわなかった一因と思われる。

II 漁 況

漁況にみられた大きな特徴は、近海スルメイカの好漁であった。日本海では前年比の3.5倍、太平洋は1.9倍、海峡が3.2倍と本県沿岸域全体にわたって好漁であった。特に日本海側では7月までに1年の水揚量全体の約2/3を漁獲し、本県日本海側前沖に北上群による好漁場が形成されたことを反映した。